「福山区の歩み」（抜粋）　植松茂

明治末期から大正・昭和初期　福山での造材作業

『ところ文庫21　常呂町郷土史話3』掲載

（略）明治42年頃、福山の呼び名は「太茶苗」といい、アイヌ語であったと聞いております。和人は2～3人くらいいたとのことでした。その後、次第に入地者も多くなりました。当時、この地区は毎年のように常呂川の氾濫で農作物が流失したそうです。

住宅はほとんどが高台地（今の東側）に住まいし、男たちは造材夫として働き、山稼ぎで生計を立ててきたそうです。最盛期の頃は、地区の戸数も70数戸あったと聞いております。

造材作業のことを書いてみたいと思います。その頃は人と馬のみの作業で、杣夫（キコリ）、藪出し人夫、また上挽き馬と一体となって素材丸太を沢の下の貯木場まで集材するのです。次に下挽きといって貯木場から馬搬で流送のできる場所まで搬出するのでした。当時の常呂川は川幅も広く、水量も多く、流送するのに適していたと聞いております。

河口近くで留め場（アバ）を作り、そこで丸太のイカダを組み、沖で待機している貨物船まで流し、本線に積み込んだそうで、相当な人夫の仕事があり、ほとんどの人が就労していたそうです。大東亜戦争の戦争後1～2年まで続いたと思います。

また、戦時中はこの山にハッカ油を取る蒸留器を設置して松葉油作りの仕事もあり、毎日勤労奉仕の人たちでにぎわったこともありました。

戦後は現在の大沢木工場も営業しており、流木の留め場から馬そりで工場まで運んでおりました。常呂小学校の前の道路脇に細い軌道が敷かれており、トロッコ（台車）に積んで馬で運んでおりました。（略）

＊注：『イワケシュ郷土史』から福山の造材に関する記述を抜粋

大正の初期から北見営林署の宝庫といわれた幌内沢の造材業が盛んになり、大正7～8年頃には一冬で5万石程度の材木が切り出されていた。切り出した材木は、常呂川を流送してオホーツク海に待機する木船に積み込み本州方面に移送した。

第2次世界大戦の盛時は、町内の青年男女を動員して軍用材の造材に精魂かたむけて汗を流したものである。その他、ハッカ釜を徴発して松葉・松根を蒸溜して油を取り、航空機の燃料にするなど、木材の乱伐が続き、その影響はいろいろな面で大きかった。その対策として、昭和23年頃から植林の振興、つまり造林事業の充実を営林署を主体に活発に行うようになってきた。（略）